平成２５年度東京都高等学校新人陸上競技選手権大会のみどころ　　女子

今年のインターハイで、東京都の女子は２種目に優勝し８種目に入賞した。短距離から混成競技にまで優秀な選手が多くいる女子は今年もレベルが高い。男子同様、来年を担う１・２年生の頑張りにご声援を・・。

・短距離

１００ｍでは、支部予選の記録では風力などの条件的に比較はしがたいが、エドバー　イヨバ・上村　希実の東京高校１年生コンビ、荒井　アンバー（日工大駒場２）、澤田　イレーネ（都文京１）の争いとなることは間違いないが、１１秒台の声を聞きたいところだ。

２００ｍも１００ｍ同様だが、４００ｍを得意とする小林　茉由（八王子２）がこれに加わりそうだ。２４秒台を目指してもらいたいが２５秒前半が入賞となるだろう。

４００ｍは、大分インターハイで準決勝にコマを進めた小林が優勝することは間違いなさそうだが、５４秒台の東京都高校記録を目標としたいところだ。この種目は、八王子・白梅学園・東京の３校の選手たちが決勝を独占しそうだ。

中長距離

女子８００ｍは今年、東京都から５名もの選手がインターハイに出場した。そのうち２名の選手が今大会に出場し、８位入賞した２分９秒台の記録を持つ奥田　静香（東京２）が最有力だろう。鈴木　菜紗（白梅学園２）は積極的にレースしラストも鋭いことからインターハイ並みの混戦が予想される。支部予選トップタイムの草場史佳（東京１）、木村　綾愛（早実１）も優勝を狙える力があるだけにゴール直前まで縺れることは必至だ。

１５００ｍ・３０００ｍでは佐藤　みな実（順天１）、元廣　由美（八王子２）のマッチレースとなるだろう。スピード・持久力ともに互角でありレース支配もできることからスパートをかけるタイミングが勝負を分けそうだ。東京都駅伝の前哨戦となるレースとなるだろう。このほか、東京・早実・都上水とこちらも駅伝で上位を狙う学校の選手が入賞を争う様相だ。

・ハードル

１００ｍＨでは、史上最高のレベルとなりそうだ。インターハイ準決勝に進出し、１３秒台の記録を持つ澤田イレーネ・オギモンギ（都文京１）が東京都高校記録をマークし「東京国体」に弾みをつけたいところだ。スピード・ハードリングとも申し分なく優勝候補筆頭だろう。しかし、七種競技インターハイ２位で１４秒１台の自己記録を持つ澤田　珠里（白梅学園２）も黙ってはいないだろう。競り合いの中でも自分のリズムを保つことができれば大会新記録の期待もできるのでは？同じ澤田の対決は今大会必見の種目だろう。２人以外にも鳴川　亜美（白梅学園１）、田島　梨紗乃（東京１）らをはじめ１４秒台の選手も多く記録にも期待が持てるが、大会最終日は大井競技場。向かい風の可能性が高いことが懸念される。

４００ｍＨでは、伊藤　明子（田園調布学園３）がインターハイに優勝し新たな歴史を刻んだ。これを励みに新人も奮起したいところだ。その中で、柳下　美佐子（戸板女２）が南関東にも出場しており１分０２秒台をマークしているだけに優勝候補と言えよう。スプリントもハードリングもこの夏で成長したようだ。自己記録を更新し一気に１分の壁を破ることも期待できる。吉澤　怜（日本橋女２）、大野　穂花（東京２）も有力だ。

・競歩

今年、久しぶりに東京都からインターハイに出場した加藤　泉美（都高島２）が優勝することは間違いだろう。大分でも健闘し、猛暑の中で粘り強く歩く姿は感動した。自己記録を２４分台に伸ばしたいところだが、涼しくなる今大会あたりからそれに挑戦してもらいたい。１２名の出場と昨年から減少傾向にあるだけに、この種目に挑戦する選手を増やしていきたい。そのためにも強化練習会で、専門指導者による練習会を企画し参加者を募りたい。その際は奮ってご参加ください。

・跳躍

走高跳では、１ｍ６５ｃｍ以上の自己記録を持つ選手３名での優勝争いとなるだろう。小林　玲奈（都足立新田１）、澤田　珠里・高橋　このか（白梅学園１）である。澤田・高橋は七種競技中でも常に１ｍ６０以上を越えていることから安定感がある。また、小林は１ｍ６７と自己記録は優っていて１ｍ７０を跳ぶことができる可能性も一番高いだけに楽しみな選手である。他には、佐藤　佑香（東京１）、古川　聡美（都片倉２）が１ｍ６０以上の記録を持ち安定していることから上位を争うことだろう。

走幅跳では、白梅学園から出場する３名が自己記録５ｍ５０以上を持ち上位を独占することは間違いない。特に水口　怜（２）は自己記録５ｍ７１を持ち都総体に続き最上位を狙う。また、走高跳同様澤田・高橋の混成コンビも５ｍ５０以上をコンスタントに跳ぶためこの３人での争いとなるだろう。他校の選手が上位に食い込むためには５ｍ５０を跳ぶことが必要となる。

三段跳は今年４１名もの出場選手で行われる。この夏、第一回全国選抜大会に出場した小林　優里（江戸川女２）が唯一１１ｍを越える１１ｍ４０の自己記録を持ち優勝を目指している。昨年以来この種目を専門にトレーニングしてきているだけに技術的にも卓越しており優勝の確率は高い。１１ｍに挑戦することが上位入賞への条件となりそうなだけに多くの選手の目標としてほしい。

・投擲

砲丸投では、長沼　瞳（郁文館３）が大分インターハイで優勝し久しぶりの１４ｍプッターとなった。「東京国体」での優勝を期待したい。その長沼とインターハイに出場した坂本　早映（戸板女）が１年生ながら１２ｍ以上の自己記録から今大会の覇者となることは間違いないだろう。春先の勢いは無くなってきているが、他に１１ｍ以上の記録を持つ選手がいないだけに優勝は堅いだろう。１０ｍ後半が入賞ラインか？

円盤投では、南関東大会で３５ｍを投げた石井　藍美（東京２）が優位だ。支部ではケガのため振るわなかったが完治すれば優勝候補だろう。支部予選での記録では福田　小雪（都東大和２）が３２ｍ５５とし唯一３０ｍを越えていて石井と争う一番手だろう。今年は出場者が減少し予選が無くなり史上初の決勝のみとなったこの種目、来年は出場者が増えることを願うばかりだ。優勝記録が４０ｍに近づく事を願いたい。

やり投げは、後藤　紗希（東京２）が唯一４０ｍを越えていて優勝に一番近い存在だろう。都総体は肘を痛めていて南関東出場はならなかったが、それも完治し自己記録更新を目指している。後藤を追うのは菅沼　奈未（明中八王子２）だが、４０ｍを越えなければそれは難しくなるだろう。４０ｍオーバーが多数出てほしい。

・リレー

女子の両リレーは、東京高校と八王子の力が拮抗している。両校ともインターハイを経験し、かつ主軸となる選手が複数いるだけに接戦となることは必至だ。来年も全国優勝を目標とするような好記録が誕生する可能性もある。複数のチームで切磋琢磨し「ライバル意識」を持つことが競技力向上には欠かせない事だろう。

優勝候補の両校を追うのは、４×１００ｍリレーでは、白梅学園・都つばさ・日工大駒場、４×４００ｍリレーでは、白梅学園・日本橋女子あたりが関東新人出場を競い合うのではないだろうか？

・総合

総合争いは、昨年優勝で混成の選手が多種目で得点可能な白梅学園、そのリベンジを果たし今年の都総体優勝の東京高校、短距離・長距離で大量得点を見込める八王子の「三つ巴」となりそうだ。しかし、幅広く得点できる東京が一歩リードしているといえるが、最後のマイルリレーまで接戦となるだろう。

・そして

「東京オリンピック」が２０２０年に行われることが決まった。７年後といえば現在の高校生の世代が２２歳から２５歳と「全盛期」の年齢となる。今大会出場の選手から「オリンピック」に出場する選手が出てくれることを・・。そして、東京都の高校生が数多く「金メダル」に挑戦していく「夢」を持ってくれることを希望して本大会を見守っていきたい。